『銀河鉄道の夜』における二つの主題：万人救済と根源的な母

2 Themes in *Night on the Galactic Railroad*: Seeker of Happiness for All and Primordial Mother

長　田　恵　子*
Keiko NAGATA

要　約　宮沢賢治（1896-1933）が晩年まで改稿し続けた『銀河鉄道の夜』（1934）は，第一，二次稿ではカムパネルラと共に菩薩道を歩もうとして叶わなかったジョバンニが，たった独りで万人救済を決意することが主題であった。しかし第三，四次稿からは，もうひとつ新たにジョバンニが亡妹トシであろうカムパネルラを，大乗仏教の浄土の一つである兜率天のイメージをもつ「天の野原」へ送り届けることが隠れた主題になったと考える。第一，二次稿では二人は緑色の切符を分け合っていたが，第三次稿からはカムパネルラはジョバンニとは違う灰色の切符を持つ。また同じく第三次稿から賢治は作品の中に根源的な母のイメージをもつ「野原の母」を出現させた。この母は兜率天に住む弥勒菩薩をイメージしたものではないかと考える。その根源的な母にカムパネルラを託し，現世へ戻ったジョバンニは「根源的な母からの糧」である牛乳を抱えて衆生の中へと歩んで行く。

キーワード：万人救済　根源的な母　　乳のテーマ　兜率天　灰色の切符

Abstract□In the first and second drafts of Kenji Miyazawa's *Night on the Galactic Railroad*, Giovanni embarks on the way of the bodhisattva with Campanella. Unsuccessful, Giovanni resolves to seek happiness for all people on his own. But the third and fourth drafts conceivably add Miyazawa's veiled determination to deliver his deceased Toshi -in the form of Campanella- to "heaven's field," a place analogous to Mahayana Buddhism's celestial heaven known as the Joyous Realm. Giovanni and Campanella share a green train ticket in the earlier drafts, but Campanella has a gray ticket starting with the third draft. A mother in a field emerges, depicting the primordial mother. This mother may have been inspired by Maitreya, a bodhisattva said to reside in the Joyous Realm. Entrusting Campanella to this mother, Giovanni returns to this world and walks among its inhabitants carrying milk—sustenance from the primordial mother.

□**Key words**：Seeker of happiness (savior), The primordial mother, Mother's milk, The Joyous Realm (Tushita), Gray ticket

はじめに

琴の星に導かれるように天の川の中を走る銀河鉄道に乗ったジョバンニの座席の前にいつの間にか級友のカムパネルラがいた。ジョバンニにとって逃避のような現実からの分離，生と死のどちらでもない時間を過ごす境界性の中を走る銀河鉄道のリミナリティな空間，そしてカムパネルラとの別れのあと現実世界にもどって＜牛乳＞という新たな希望を獲得する。そのような宮沢賢治の最後の作品『銀河鉄道の夜』は孤独な少年ジョバンニが現実世界から異空間へそして親友カムパネルラを失ってまた現実世界へ戻るという典型的な神話の型を踏襲している物語である。しかしそれは現実の賢治にとっては親友保阪嘉内との信仰による決別，また信仰を共にする妹

*　家政学部児童学科　学術研究員
Department of Children's Literature,
Faculty of Home Economics Researcher

トシとの死別という現実での経験によるものである。

賢治は宇宙科学的な知識と大乗仏教的な宗教知識を融合させ幻想的な異空間を創り上げた。

本稿ではこの作品には主題が二つあると考える。一つは妹トシや親友保阪嘉内と共に菩薩道を歩もうとして叶わなかった賢治の孤独と決意。もう一つはトシの死後の居場所を求めて送り届ける使命である。それを証明するために銀河鉄道の切符の違いとジョバンニの決意の変化からジョバンニである賢治の心の変化を見る。作中ではカムパネルラと共に万人救済を目指そうとするがカムパネルラを失い，孤独の中独りで現実世界へ戻り，みんなのほんとうの幸いを探すことを決意するのが一つの主題であろう。しかしもうひとつ隠れた主題として，第三次稿からの銀河鉄道の旅はジョバンニにとって死んだカムパネルラを天上へ送り届けるという使命が認められる。そのためにはカムパネルラが衆生の人々の中の一人であることをジョバンニはみとめなければならず，美しい野原からカムパネルラだけに見える根源的な母の元へ唐突ではあるが結果的に送り届けるのである。それは賢治にとって亡妹トシを法華経の来世として弥勒菩薩の住むという兜率天へ送り届けたいという願望なのである。第四次稿はその根源的な母なるイメージのモチーフに溢れている。

1. 孤独と決意

『銀河鉄道の夜』の中に漂うジョバンニの孤独は，カンパネルラと共にどこまでも一緒にすべての人のさいわいを探し求めようとして得られず，たったひとりでこの現実世界に戻り，すべての衆生を救おうと決心する孤独である。それはジョバンニでもある賢治が親友保阪嘉内や妹トシと一緒に菩薩道を極めようとして得られなかった孤独である。賢治の孤独はたった独りで万人を救済しようとする菩薩の道を求めようとすることからくる。

賢治の信奉した法華経の根本思想は，あの世ではなくこの世で理想の世界を実現することである。そのために彼は生きている世界で一切の衆生を救わなければならない。

彼は唯一の理解者であったトシや法華経信仰を共にしようとして出来なかった保阪とも別れ，独りこの世界で法華経の教えを広め理想の世界を構築しようとした。その決心を不動のものにすべく『銀河鉄道の夜』の中でジョバンニに決意表明をさせたのだ。

「さあ，やっぱり僕はたったひとりだ。きっともう行くぞ。ほんたうの幸福が何だかきっとさがしあてるぞ。」（第一次稿 27，第二次稿 129）

「あゝマジェランの星雲だ。さあもうきっと僕は僕のために，僕のお母さんのために，カムパネルラのためにみんなのためにほんたうのほんたうの幸福をさがすぞ。」（第一次稿 27，第二次稿 129，第三次稿 176）[1)]

2. 死んだトシの居場所を探して

天沢退次郎は，「銀河鉄道の夜」を通じて，「銀河のなかをどこまでもカムパネルラと一緒に行くこと」と，「ジョバンニには母のところへ牛乳を持ち帰ること」の二つの目的があると述べている。[2)]

しかしカムパネルラと銀河の中をどこまでも一緒に行くことはカムパネルラが暗黒星雲である石炭袋の近くで消えてしまい叶わなかった。確かに賢治はジョバンニのどこまでもカムパネルラと一緒に行きたかった願望と，そうできずに独り現実世界に戻って，みんなの本当の幸いを探すという仕事を果たす決意を描きたかったのかもしれない。しかしその主題は改稿するにつれて変わってきているように思われる。これについて考察すると，ジョバンニは不完全な幻想第四次の銀河鉄道というリミナリティな領域の中，本当はカムパネルラとはどこまでも行けないことを予感しながら，カムパネルラを銀河の果てまで送って行ったのではないだろうか。それはカンパネルラが亡くなったトシの表象だと考えるならば合点がいく。賢治が 1922 年 11 月 27 日に結核により 24 歳で早世したトシの居場所をずっと探し求めていたことは詩『春と修羅』から理解出来る。

あゝけふのうちにとほくへさらうとするいもうと
よほんたうにおまへはひとりでいかうとするか
わたくしにいつしよに行けとたのんでくれ
（松の針）

この詩はトシの死が近づきもうすぐ賢治を置いて別の世界へ去ろうとしているときに，それは無理なことだと分かっていながら一緒に行きたいと願う賢治

の心だ。

また，「春と修羅」の中の「永訣の朝」，「松の針」に続く「無声慟哭」においてはその行き先を尋ねている。そしてあたらしく天にうまれるよう願っている。

わたくしが青ぐらい修羅をあるいてゐるとき
おまへはじぶんにさだめられたみちを
ひとりさびしく往かうとするか
信仰を一つにするたつたひとりのみちづれの
わたくしが
あかるくつめたい精進（しやうじん）のみち
からかなしくつかれてゐて
毒草や蛍光菌のくらい野原をただよふとき
おまへはひとりどこへ行かうとするのだ（無声慟哭）

どうかきれいな頬をして
あたらしく天にうまれてくれ（無声慟哭）

天沢は「現存原稿を見てもおよそ十年ちかい歳月にわたって四度の改稿・変転の層をさらしている『銀河鉄道の夜』の成立過程は，作品行為というものの深い謎をはらんでいるが，1924 年 7 月・8 月詩群は，この傑作の発想のありかを照射するものといえよう。」と述べ，『銀河鉄道の夜』の発想・成立と『春と修羅』第二集草稿のうち「166 薤露青」や「179」（1924．7．17）がその発想の源だと言及している。[3)]

賢治は詩「薤露青」において亡くなった妹トシの行き先を探して空を見上げ，銀河を想い，「そのままどこへ行ってしまったか分からないことがなんということだろう……」と嘆いている。賢治にはこの時点でトシの行くべき場所が見つからないのだ。その想いが地上世界と幻想第四次の夢の世界の二つの領域を行き来する『銀河鉄道の夜』を執筆することへつながっていった。ジョバンニである賢治は夢の世界の中でトシを求めて銀河鉄道の旅に出る。始まりは天気輪の丘の上へたどり着いたジョバンニが，天の川がしらしらと南から北へ亙っているのを見，また鳥が一疋，丘の上を鳴き続けながら通っていくのに出会う。詩『春と修羅』には大乗仏教の説く彼岸への憧れが込められているが，その中の詩「白い鳥」には死んだ妹トシであるような鳥を思い起こさせる。死者の魂のような鳥かもしれない。宮沢賢治語彙辞典によれば，「詩「白い鳥」では，賢治は亡妹トシを空高く異空間めがけて飛翔していく鳥になぞらえた。」とある。[4)]

二疋の大きな白い鳥が
鋭く悲しく啼きかはしながら
しめった朝の日光を飛んでゐる
それはわたくしのいもうとだ
死んだわたくしのいもうとだ
兄が来たのであんなにかなしく啼いてゐる

またこの鳥は『銀河鉄道の夜』においてはカンパネルラの魂であって溺れた川から銀河鉄道を目指して飛んできたと考えることも出来る。

天沢は『銀河鉄道の夜』がオルフェ神話の典型的な型を踏襲しているという。「死んでいくカムパネルラはユーリディス（エウリュディケー）であり，死の国をともに旅しながらついに相手を見失って現実の世界へ戻るジョバンニがオルフェ（オルフェウス）である」と述べる。ジョバンニは幻想第四次の世界でカムパネルラとどこまでも一緒に行こうとしながら暗黒星雲，石炭袋の近くでカムパネルラを失ってしまう。ジョバンニはどこまでも一緒に行きたいと強く願いながらかなわず現実の世界へ独り戻るのである。ジョバンニを天気輪の丘の上から銀河鉄道の旅へと誘う琴座の星はギリシャ神話ではオルフェウスの琴である。

また賢治は神話のみならず，科学的な宇宙観と法華経の宇宙観を一体のものとして銀河系宇宙を体感していた。科学と宗教は融合すると考えていた。賢治が信仰する法華経は「決して仏教の哲学的理論書ではなく，一種の宗教文学作品というべきものである。宇宙的スケールの壮大なストーリーが展開する」のである。[5)]

3. 主題の変化と切符

天沢と入沢は，討議の中で「第三次稿までの初期形『銀河鉄道の夜』と後期形『銀河鉄道の夜』とは非常に質が違う。」[6)] と述べている。確かに第三次稿まではブルカニロ博士が登場しておりさまざまな解読が出来る。実験と言う言葉を使い科学的に宗教を説明しようと試みる箇所もある。しかし筆者は第一次稿及び第二次稿と，第三次稿及び第四次稿との

質が変わったことを指摘したい。

一番の違いはその主題であろう。先に述べたように第二稿までのジョバンニの願いは，カムパネルラと一緒に「ほんたうのさいはひ」を探しにどこまでも行こうとすることであり，カムパネルラが消えた後のジョバンニの決意が作品の主題であった。

カンパネルラは石炭袋のところで急に消えてしまい，残されたジョバンニは「誰にも聞こえないやうに窓の外へからだを乗り出して力いっぱいはげしく胸をうって叫びました。

さあ，やっぱり僕はたったひとりだ。きっともう行くぞ。ほんたうの幸福がなんだかきっとさがしあてるぞ。」[7]

このように第二稿までは，ジョバンニはたった独りになっても「ほんたうのさいはひ」を探しに行くという決意を見せる。

ところが第三次稿と第四次稿では「窓の外へからだを乗り出して力いっぱいはげしく胸をうって叫び，それからもう咽喉いっぱい泣き出しました。」[8] と泣き出す場面に変わり，独りでがんばろうとする決意表明がなくなっている。このように第一次稿，第二次稿では，カムパネルラとともに「ほんたうの幸い」を探せなくなっても独りでその志を貫こうとしていた主題が少し変わってきているように見受けられる箇所である。

また銀河鉄道の切符についてだが，第一次稿においては「僕たちどこまでも行ける切符持ってるんだ。」とし，第二次稿では，この切符の場面から物語が始まる。「カムパネルラももぢもぢしてたしかに持っていなゐやうでした。（あゝ，事によったら僕が二人のを持っているかもしれない。）と思ひながらジョバンニが上着のかくしに手を入れてみたら，四つ折りのハンカチくらいの緑色の紙が入っていた。」[9]

このように第二次稿まではその緑色の切符は二人のものとして扱っていた。しかし第三次稿からは，「カムパネルラは，わけもないといふ風で，小さな鼠いろの切符を出しました。」とあり，ジョバンニが持っていた四つ折りのはがきぐらいの緑色の紙とは別にカムパネルラは自身の切符を持っていた。二次稿までカンパネルラは切符を持っておらずジョバンニと分け合っていた切符が，第三次稿からはカンパネルラが鼠色の自分自身の切符を持っていると変更されている。入沢も天沢もこれは大きな書き換えであり，カムパネルラは自己犠牲を払いながらも普通の切符であると云っている。[10]

この鼠色の切符は何をあらわしているのであろうか。筆者はそれを他界へ行くための衆生の人が持つ切符だと考える。第三次稿に来て，ようやく賢治はカムパネルラを共に菩薩の道を歩む同士ではなく，衆生の万人の中にカムパネルラを見るようになるのである。

第三次稿で初めて賢治であるジョバンニは，「銀河のなかをどこまでもカムパネルラと一緒に行くこと」を諦めたのだ。

筆者はこの時点でカンパネルラが衆生に生きる私たち全ての代表になったと考える。賢治が最後まで信仰した法華経は，万人の救済をその主要目的としている。カムパネルラと共に銀河鉄道に乗って天の川の中を進み，カンパネルラを急に失ったジョバンニに第三次稿では「黒い大きな帽子をかぶった青白い顔の痩せた大人」が現われ，「おまえのともだちがどこかへ行ったのだらう。あのひとはね，ほんたうにこんや遠くへ行ったのだ。おまへはもうカムパネルラをさがしてもむだだ。」という。そして「みんながカムパネルラだ。」「あらゆるひとのいちばんの幸福を探しにみんなといっしょに早くそこに行くがいい」と教え，「どうしてそれを求めたらよいでしょう」というジョバンニの問いに「わたしもそれを求めている」と答えている。[11] その青白い顔の痩せた大人は衆生の中で全ての人々の幸福を目指そうとしながらその方法を求めている賢治そのものである。賢治はこのように述べながら，ジョバンニに孤独の中にあっても衆生を救う菩薩の道を歩ませようとしている。しかし第四次稿ではこの場面が消えてしまう。

4. 根源的な母

第一の主題，カムパネルラとどこまでも行くという希望が失われた第三稿からは，第一，二次稿ではなかった「野原の母」が出現する。[12]

この母のことを天沢は根源的な母のイメージだと述べている。[13]　第三次稿から現われた根源的な母はこの作品の隠れた主題を導くものではないだろうか。第四次稿からはますます母のテーマが大きく物語を占める。また天沢はジョバンニの使命はみんなの幸いを追及することの他に，母へ牛乳を持ち帰ることだとして「この＜乳＞というモチーフは『銀

河鉄道の夜』という作品のひそかなライトモチーフであることを忘れるわけにはいかない。」と指摘する。[14]

この＜乳＞のもつイメージを根源的な母の隠れたモチーフとして，この作品の中の母なるものを追求したい。それは賢治の浄土感とつながるものである。万人の幸福を追求し続けた賢治がそれとともに最後に見いだしたのが母のテーマであった。それも単なる母ではなく根源的な母である。『銀河鉄道の夜』には牛乳，天の川など母なるもののイメージが底流を流れている。

第四次稿は，ジョバンニとカンパネルラの午後の授業から始まり，先生が「・・・乳の流れたあとだと云われてたりしてゐたこのぼんやりと白いものがほんたうは何かご承知ですか。」という文章から始まる。そして天の川を巨きな乳の流れとも云っている。またジョバンニが家に戻ると彼の母親への牛乳が配達されていないという。ここまで銀河鉄道の旅に入る前の導入部として新たに三章が付け加えられている。そして第三次稿では最初の章となる四章「ケンタウル祭の夜」に入る。牛乳を取りに牛乳屋へ行くとどこか具合の悪そうな老女が出てきて牛乳はないという。天沢は「ジョバンニが銀河鉄道の夢の旅へ出立する前にかれが牛乳の入った瓶を手中にすることはありえない」[15]と云っているが，母へ牛乳を持ち帰ることが出来ないのは必然的に天の川への旅を示唆しているといえる。ジョバンニは巨きな乳の流れといわれる天の川へ＜乳＞を取りに行くために母親の所へは戻らず天気輪の丘へ行くのだ。そこで夢を見ながら琴の星と天の川に導かれて銀河鉄道の旅が始まり，知らずカムパネルラと出会い天の野原へ着く。そこは生と死の世界の境界を走る銀河鉄道のリミナリティな幻想第四次の世界であった。

> 「あ，あすこ石炭袋だよ。そらの孔だよ。」カムパネルラが少しそっちを避けるやうにしながら天の川のひととこを指さしました。ジョバンニはそっちを見てまるでぎくっとしてしまひました。　ジョバンニが云いました。「僕もうあんな大きな暗の中だってこわくない。きっとみんなのほんたうのさいはいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行かう。」「あゝきっと行くよ。あゝ，あすこの野原はなんてきれいだらう。みんな集まってるねえ。あすこがほんたうの天上なんだ。あっあすこにいるのぼくのお母さんだよ。」（第三次稿 173，第四次項 167）[16][17]

カムパネルラはきれいな野原を指して叫んだのだが，ジョバンニにはぼんやり白くけむってゐるばかりでお母さんなど見えず，振り返るとカンパネルラは汽車の中から消えてしまっている。ジョバンニには見えない母のもとへ行ったのであろうカムパネルラの云った「ほんたうの天上」とそこにいる「ぼくのお母さん」とはだれなのであろうか。それらを明らかにすることが賢治の浄土観を理解することになるのではないか。それ故，以下「ほんたうの天上」とはどこなのか，また「ぼくのお母さんだよ。」とは誰なのかを考えたいと思う。

5．「ほんたうの天上」と「ぼくのお母さん」

１９２４年に出版された詩集『春と修羅』の中に鎮魂歌「永訣の朝」があるが，その中に兜率天という天上の世界が出てくる。

> （うまれでくるたて
> こんどはこたにわりやのごとばかりで
> くるしまなあよにうまれてくる）
> おまへがたべるこのふたわんのゆきに
> わたくしはいまこころからいのる
> どうかこれが天上のアイスクリームになつて
> おまへとみんなとに聖い資糧をもたらすやうに
> わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ

輪廻転生を説く法華経に帰依していた賢治は，妹が死んだ後に行く世界が，初めは漠然と天上の世界と考えていたかもしれない。賢治は死にいくトシが「今度は自分のことばかりに苦しまないで人のために尽くせるように生まれたい」という言葉をうけて，自分がトシのためにとってきたこの雪が，いつかは天上のアイスクリームとなって，トシとすべての人にとって聖い食べ物となることを願うのだが，後年，賢治自身によって，天上のアイスクリームは「兜卒の天の食」と書き換えられた。兜卒天は賢治が，妹の生まれ変わる世界と考えた他界なのではないだろうか。法華経による大乗仏教的な感覚を持っていた賢治が妹の死を深く悼み詠んだ挽歌だが，「兜率の天の食」に変えたのは，トシを心から兜率天という

浄土の住人にしたかったからである。

また先に述べた詩「薤露青」の中には,「あゝいとしくおもふものが　そのまゝどこへ行ってしまったかわからないことがなんといふことだろう」という箇所がある。

薤露青とはラッキョウの葉の上に丸く固まった露のようなものであり,『宮沢賢治語彙辞典』の中では，人命のはかなさと澄み切った悲哀のニュアンスが漂うとしているが，この地上から見上げた銀河のその銀河の中で無方の空に散らばった魂の所在を探す歌なのではないだろうか。そのトシの魂の所在を探し続けた賢治にとって，この詩は『銀河鉄道の夜』の序のようなものである。賢治はトシの死後，ずっとその行方を捜し続けて兜率天という浄土をみつけたのだ。

また，先に示したように琴の星はオルフェウスの神話に彩られている。オルフェウスを祖とするオルフェウス教は輪廻転生思想を持っていた。賢治の信仰する法華経も輪廻転生思想がある。「今度生まれてくるときには」というトシの輪廻転生を示唆する言葉が，単なる「天上のアイスクリーム」ではなく，後年もっと具体的な法華経の浄土である「兜卒の天の食」に変わったのではないだろうか。賢治はトシの為に兜率天という浄土を見いだしたのだ。

兜率天とは仏教における宇宙観的天上界の一つである。欲界六天の第四に位し，仏となるために修行中の弥勒菩薩がいるところである。弥勒菩薩は釈迦の後を補う未来仏とされ，兜率天にのぼり釈迦滅後五六億 7000 万年後にこの世に下り衆生を救うという。また兜率天の思想は人々が往生した後やがて弥勒菩薩がこの世に下るとき一緒に現実世界に戻れるとも云われている。[18]

池川敬司は彼の著書の中で，法華経と弥勒信仰の融和性を取り上げている。そして「この法華経の兜率天上生を説く功徳が，大正 11 年 11 月 27 日の，最愛の妹とし子の死に直面した際，賢治に一つの啓示としての意味を持たせていることは確かである。」とし，「具体的なかかわりの時期が，一つは最愛の妹と死に直面した時であり，一つは，自己の死をはっきりと自覚していた時である。」[19] とも述べている。賢治は『銀河鉄道の夜』の第三次稿辺りから自己の死もはっきりと自覚したのではないか，そのため母なるものがその深層心理の中に強く浮かび上がってきたのではないかと考える。

また弥勒信仰には上生と下生の二つの信仰形態があるという。上生信仰は賢治にとっては弥勒菩薩のいる兜率天へ妹トシを成就させることであり，下生信仰における弥勒菩薩が下生すると人間界は一変して黄金と化し，地上に浄土が現出するというのは法華経の根本思想と同じあの世ではなくこの世で理想の世界を実現することである。

衆生の世界で浄土を作ろうとするジョバンニは，キリスト教徒とおぼしき青年とほんたうの神さまとうその神さまの話をする。その中でジョバンニは「ぼくたちこゝで天上よりももっといゝとこをこさえなけぁいけないって僕の先生が云ったよ。」という。[20] [21] ジョバンニの使命は現実世界で万人救済を実行することだが，そのためにも弥勒菩薩の救いが必要なのである。また賢治は弥勒菩薩が五六億七千万年後に再び人間界に転生するように，トシが再び生まれ変わることを願い，トシが兜率天に往生することを望んだのだ。

賢治は『銀河鉄道の夜』の中で天の川の果ての石炭袋のそばの美しい野原を兜率天とイメージして描いたと思える。

> 「あゝ，あすこの野原はなんてきれいだらう。みんな集ってるねえ。あすこがほんたうの天上なんだ。あゝあすこにゐるのはぼくのお母さんだよ。」カムパネルラは俄かに窓の遠くに見えるきれいな野原を指して叫びました。[22]

カムパネルラが「ぼくのお母さんだよ。」と言っている野原の母は賢治にとっての根源的な母であり弥勒菩薩のイメージなのではないだろうか。賢治は『銀河鉄道の夜』の中で，トシを兜率天の弥勒菩薩のもとへ送り，ジョバンニは，カンパネルラを石炭袋の側の野原の母へ送って行ったのだ。

賢治のようにジョバンニは現実世界ですべての人々の幸せを求めていくが，兜率天のトシのようにカンパネルラは天の川の中の石炭袋の野原の中で輪廻転生するまで待機するのだ。実際の南十字星の石炭袋は暗黒星雲であり，その中では一生を終えた星々の宇宙のガスや微塵を集めてまた新しい星々が生まれるという。賢治はトシの死後の居場所を求め，そして母なるものへ送り届ける使命をこの物語の中で果たしたのである。

6. ＜乳＞のモチーフ

さらに先に述べたように天沢はジョバンニの使命はみんなの幸いを追及することの他に，母へ牛乳を持ち帰ることだとして「この＜乳＞というモチーフは『銀河鉄道の夜』という作品のひそかなライトモチーフであることを忘れるわけにはいかない。」と述べているが，現世の母の元へ牛乳を持ち帰るとはどういう意味があるのだろうか。

賢治は『銀河鉄道の夜』における最後の第四次稿で第三次稿から出現する＜乳＞のテーマにますますフォーカスしている。この＜乳＞のモチーフは母なるものの代替であり，先に述べたように死が近づいていることを自覚し始めた賢治にとって彼の深層心理に潜む根源的な母なのではないだろうか。当初，その母から現実世界では牛乳として手に入らなかった＜乳＞を天の川の中でもらうことができたのかもしれない。それゆえ現実世界でも牛乳を手に入れることが出来た。天沢は「牛乳を手にいれたジョバンニはもうあとはただそれを母親の所へ運ぶだけでいいと思われたが，彼はその前にカムパネルラの死を知らなければならない。それはジョバンニがユーリディスを失ったオルフェであることをつきつけられなければならないからだ。」[23] と述べている。それはつまり現実世界における賢治にとってのトシの死の本当の自覚であると考える。

> ジョバンニには「下流の方の川はゞいっぱい銀河が巨きく写ってまるで水のないそのまゝの空のやうに見えました。ジョバンニはそのカムパネルラはもうあの銀河のはずれにしかゐないといふやうな気がしてしかたなかったのです。」[24]

下流のところで川はそのまま天の川へ流れつながり，それは現実の世界と幻想第四次銀河のつながりであり，まわり廻っていく輪廻転生の世界を彷彿とさせる。ジョバンニは現実世界でのカムパネルラの死をしっかりと受け止めつつ，菩薩の救済の具現化された＜乳＞である牛乳を握りしめて母の待つ衆生の世界へ降り立ったのである。

おわりに

当初，賢治は信念を同じくし，共に歩むことを亡妹トシや親友保阪らに求めて叶わず，たった独りで，みんなの幸いを目指して菩薩道を突き進む決意を明確にするためにこの作品を書いた。それが作品の中ではカムパネルラと共にどこまでも行こうとするが，カムパネルラを失い，孤独の中現実世界へ戻り，独りで菩薩の道を歩くことを決意するジョバンニとなった。しかしもうひとつ隠れた主題として，銀河鉄道の旅にはジョバンニにとって無意識的ではあるが死んだカムパネルラを天上へ送り届けるという使命が認められた。そのためにはジョバンニはカムパネルラが衆生の人々の中の一人であることをみとめなければならず，一緒に行く事を諦めて，美しい野原からカムパネルラだけに見える根源的な母の元へ唐突ではあるが結果的に送り届けるのである。それは賢治にとって妹トシを法華経の浄土として弥勒菩薩の住むという兜率天へ送り届けることである。賢治は弥勒菩薩のような根源的な母のイメージを創りだし，亡妹トシのために兜率天という浄土を見付けたのだ。また無事にカンパネルラを野原の母へ送り届けたジョバンニには，＜乳＞のイメージがつまり救済となる＜弥勒菩薩の糧＞が現実の世界では具現化された牛乳となって得ることが出来たのである。このように，たった独りでも法華経の根本思想であるこの世で理想の世界を創り上げようとする賢治の願いと，また妹トシを弥勒と共に輪廻転生出来るとする兜率天へ無事送り届ける使命を果たした作品なのである。それは自らの死を自覚していた賢治の輪廻転生への願いでもあったのではないだろうか。

引用文献

1）宮沢賢治『新校本宮沢賢治全集第十巻　銀河鉄道の夜』筑摩書房（1995）
2）入沢康夫　天沢退次郎　『討議「銀河鉄道の夜」とは何か』青土社　74（1990）
3）同上 184
4）原子朗『宮沢賢治語彙辞典』東京書籍　45（1989）
5）菅野博史　『法華経入門』岩波新書　ii（2001）
6）入沢　前掲書　156
7）宮沢 1）　前掲書　27，129
8）同上　174
9）同上　111
10）入沢　前掲書　39

11）宮沢 1）　前掲書　174
12）同上 173
13）入沢　前掲書 50
14）同上　68
15）同上　83
16）宮沢 1）　前掲書　173
17）宮沢賢治『新校本宮沢賢治全集第十一巻　銀河鉄道の夜』筑摩書房　167（1996）
18）菅野　前掲書　28
19）池川敬司　『宮沢賢治とその周縁』　双文社　76　（1991）
20）宮沢　前掲書 1）171
21）宮沢　前掲書 17）165
22）同上　167
23）入沢　前掲書　83
24）宮沢　前掲書 17）170